

# インドを旅して(その1)

高野史男

## (1) 国際地理学会への参加

本年1月9日から16日まで8日間、インドの首都ニューデリーから約100km程東南にある小都市アリガールの回教大学で国際地理学会が開催された。集つたのは地元インドを始めアジア、アフリカ

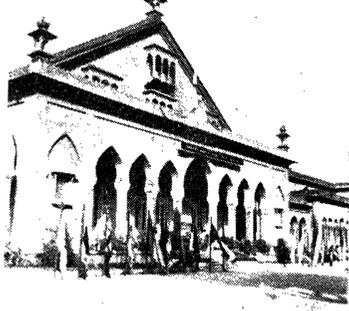


写真1 国際地理学会会場

ヨーロッパ、アメリカなどから18ヶ国、約250人程の学者及び学生で、①水力電源開発 ②土地利用調査 ③国家再建における地理学の地位 ④大学における地理教育 ⑤人口食糧問題 ⑥乾燥地域 ⑦地理学と人種主義 ⑧気候変化の8つのテーマについて終始まじめな発表、討論が行われ、極めて盛大かつ成功裡に閉会した。この学会で注目すべきことの一つは共産圏諸国が比較的多数の学者学生を送つて活躍したこと、他は国際アジアアフリカ地理研究協議会 (International Council for the Study of Afro-Asian Geography 略称 ICSAAG) が結成されたことで、この ICSAAG は今後の世界の地理学界の動きにどの

ような影響をもたらすか、興味ある問題であろう。インド側ではアリガール大学を挙げて歓迎陣を設け、心温まる親切なもてなしをして呉れた。世界の地理学界におけるインド地理学の水準は必ずしも低くはなく、多数の地理学者が種々の困難な条件にも拘らず、なかなか優れた研究をしているのには敬意を表すると共に、この学会に唯一人の日本人として出席した筆者は、我々日本の地理学者ももつと広い視野を持つて努力しないと後れを取るおそれがあると痛感させられたのである。

## (2) ニューデリーの印象

学会のあとインド国内を約3週間余り旅行した間の見聞を印象に残るまゝ書いてみよう。先ずインドの首都ニューデリーには最も長く滞在したので一番印象が深い。このニューデリーは1911年、時の英国王ジョージ5世の命により建設が始められ、1931年に完成して旧都カルカッタから新都への遷都が行われた。デリー地区一帯は紀元前約1000年頃から既に幾多の王朝によつて度々首都に選ばれた極めて古い歴史的伝統を持つていたのである。最後の王朝たるムガル帝国は16世紀以来ここに首都を置いたが、漸次イギリス勢力の侵略する所となり、1858年遂にその支配下に完全に入つた。イギリスはカルカッタを英領インドの首都としたのであるが、前記の如く、1911年デリー市街南方に接する地域に新たに全く計画的に首都を建設したものである。聖なるジャムナの岸辺に位し、東南に進めば豊沃なガンデス平原を手中におさめ、西南に向えばインダス平原及びボンベイをおさえることを得、背後には西北にパンジャブの沃野、東北に越え難きヒマラヤの峻険を控えているデリー地区の地理的位置こそはインド全域を政治的に支配する“かなめ”ともいうべく、歴史上しばしば首都に選ばれたのも故なしとしないのであり、新生独立インドの首都としてもこの古くしてしかも新しいデリーは誠にふさわしい土地だといわねばならない。

デリーとニューデリーとは市街は切れ目なく連続しているが、これは全く別物といつてよい。デリーの方はムガル王朝時代の王城たるレッドフォートがジャムナ河の西岸に城壁をめぐらして厳然と

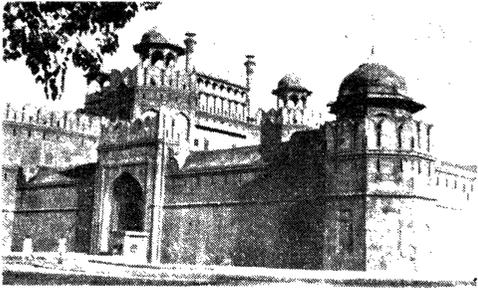


写真2 デリーフォートのラホール門

総大理石造りの美しい回教建築の数々、殊に宝石をちりばめた宮殿、後宮、妃達の豪華な浴場など驚くべきものである。その一つダイワニーハース宮の内壁には有名な“もし地上に樂園ありとせば、そはここなり、ここなり、ここなり”とペルシヤ文字の彫刻が見られるが、むべなるかなの感がある。

ラホール門を出て西に真直ぐ向うと、大手通りは即ちチャンドニチョークである。この通りはデリーの銀座に当る繁華街で、代々のムガル皇帝たちが華やか



写真3 デリーフォート内の宮殿



写真4 チャンドニチョーク街

な行列を練つた通りであり、アジア各地の商人を集め当時世界一の富める市街であつたといわれる歴史的な町である。しかし今はただごみごみした狭い道路で、歩道といわず車道といわず露店でうすまわっている。食べ物、果物、野菜、衣料、神像、装飾品、食器などあらゆるものをやかましい叫び声をあげながら売っている。交通機関が新旧様々で、タクシー、馬車、リキシャと呼ばれる輪タク、自転車、それに木箱のような市電。牛の群が道路いたる処にのさばつて悠々と遊んで居り、牛と人間とが雑居している形で、それが町の雑踏を激しくしている。道路は牛馬の糞尿やらゴミやらでひどくきたなくくさく、売っている食物などの上にはほこりや物凄い蠅の群が舞う。人々は何かそこらで買つたり、立食いしながら歩いているが、その人の多いこと、やかましいこと、きたないこと、せまいこと、何とも形容の出来ない町である。

デリーの市街は地図の上で見てもわかる通りに、迷路のように曲りくねつた不規則な狭い道路の両側は二階三階四階建の煉瓦造りのごとごとと飾りのついた建物がびつしりと密集しており、どこに行つても人が群つて居り、何かしたり何もしないで坐っている。外国人は殆んど見かけず、きたない布や毛布を身体に巻きつけたインド人ばかりで、全体が何かスラム街めいて筆者なども小路に迷い込むと余り気持がよくなかつた。デリーは全くのインド人の町、消費都市、商業都市であり、恐らく何百年前の姿と余り変わらないのではなからうか。

これに対してニューデリーの方は全くの新しい計画的な政治都市で、その設計は放射状道路を基本形式としている。基準になるのは大統領官邸（旧総督官邸）及び中央政庁から真東に延びてインド門（第一次大戦記念凱旋門）及びジョージ5世像に至るキングスウェイの大通りと、その真中でこれと直交するクインズウェイとであつて、処々に大きなロータリー式の広場が置かれて道路は全てこれから放射状に6本宛出ている。この広場の内、クインズウェイを北につき当つた処にあるコンノート広場

は最大の広場であると共にこの地区はニューデリーの商業地区で、中心に広い芝生の公園があつてそれを取りまいて円形の商店街があり、広場に面して円柱を並べたアーケードの下をそぞろ歩く人々はさつぱりとした身なりのインド人と外国人である。大体ニューデリー市街はこの地区を除くと官庁、事務所、学校、高級住宅、アパートで占められ、広い敷地をゆつたりと占めた美しい建物が整然とならび、オフィシャルクォーター及び中産階級（主として官吏）以上のインド人や外国人の居住地区となつているのである。ニューデリーの道路は皆広々として居り、又見事な街路樹を持つていて強い日射しを避けるよい木蔭を造つていゝ。中でもキングスウエイは巾400~500mもある広い公園のような通りで両側には見事な芝生と細長い池が並行して走り、この辺の眺めは日本などには見られない大陸的な雄大さを持ち、誠に気持がよく、ニューデリー市民の憩いの場所となつていゝ。毎年1月26日の共和国記念日（独立記念日）にはインド軍がこのキングスウエイからコンノート広場を経てチャンドニョーク街に至る間を戦車隊に始つて色彩豊かな軍楽隊や槍騎兵など華かな隊伍を整えて行進する。筆者も丁度このパレードを見る機会を得たが、時季は正に北部インド最良の季節で気温も快適又乾燥してゐて日本の秋のようなさわやかさであり、田舎から出てきたお上りさんなどを合せて数十万の大群集が共和国軍の威容に歓喜の眼を見張る有様は微笑ましくさえ思われた。インドは独立後日尙浅く国民全体が建国の理想に燃えて懸命の努力をしているような風潮をいたる処で感じとることが出来、時には我々に奇異にさえ感ずる程国家主義的である。

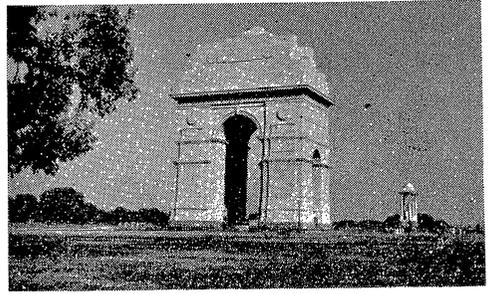


写真5 ニューデリーのインド門

例えば官庁や学校などの建物には普通の日でも必ずといつてもよい程国旗が掲げられ、集会の席では何かにつけて国歌が歌われる。中央政庁の正面入口には“自由は一国民にとつて天から降つて来るも



写真6 ニューデリーの中央政庁

のではなく自らの努力によつて勝ち取るべきものである……”の銘が刻まれているのは正に独立インド国民の意気を誇らかに示したものとて筆者には羨望の念さえ感じられた。敗戦後タナボタ式に自由を与えられた日本人には痛い所を衝かれた思いもする。国家の指導者としてのネル首相に対する全国民の信頼は誠に厚く、誰一人としてネルの悪口をいう人がない。又ネルもその信頼に値するだけの高い人格と手腕と精力とを持ち合せていゝのである。だからこそ政府の指令一下、相当強力

な施策、例えば禁酒令（州によつてその程度は様々でボンベイ州の如く全くの禁酒もあれば週一日の禁酒デーのみの州もあるが漸次全面的な禁酒に持つて行き全土からアルコールを追放するという）や農地改革、五ヶ年計画、保険会社の国有化のような社会主義的な政策も実行しうるのであろう。

インドの弱点は理想は高く国民は意気に燃えているけれども経済的実力がこれに伴わないことである。デリー、ニューデリーなどは商業都市、政治都市であるから当然かも知れないが、合せて人口175万を持つこの首都が殆んど工場らしい工場を持つていないのは驚く。高く煙を上げている大きな建物が遠望されたのは火力発電所であつた。インドでも蛍光灯が使われているがこれは多くオランダ製などの輸入品でニューデリーの店頭に見られる商品にも写真機などは勿論、缶詰、薬品など高級品は多く外国製品らしかつた。ただ繊維製品、陶磁器、靴などは殆んど国産品で、インドの国産奨励は先ずこのような生活必需品から始つて段々に高度の製品にまで及びつつあるらしいが未だ未だで、今の処政府は農村の家内工業にかなり力を入れている段階のようである。インド工業にとつて最大の悩

みは恐らく資本と技術のないこと、殊に機械類と技術者を殆んど外国に仰がねばならないことであろう。このような経済の後進性にも拘らず、インドが国際社会に大きな発言力をもっているのは誠に驚くべきことで、賢明な指導者の有無が如何に国の力を大きくも小さくも見せるかには我々日本人として随分と考えさせられる一事である。

デリーとニューデリーは前にも書いた通り全く性格の異つた町であり、デリーがどちらかといえば下層インド人の町であるのに対してニューデリーは中層以上の階級が多いように見うける。それはニューデリーが政治都市であり官吏などが多いからである。インド政府はこの上層と下層の階級差の余りにもひどく、中産階級の少いインド社会の欠陥を是正するためなるべく中産階級を育成しようとしている如く見える。その第一がこの官吏であり、従つてインドでは官吏がずい分優遇され幅をきかせている。高級官吏になると相当高給を貰い立派な官邸に入つて大したものらしいが、それ程でなくても一般官吏は安い家賃でアパートに入居でき、一般の生活水準よりかなり高いようである。ニューデリーは唯一の交通機関たるバスの発達が貧弱で、市域は馬鹿にだだつ広いので官庁などに勤める人々はよく自転車を利用する。朝の通勤時のニューデリーの大通りなどこの陸続とつづく自転車の行列が物凄いわかりで実に壯観である。処が一般市民はこの自転車さえ仲々買えないのである。

### (3) アリガール回教大学にて

国際地理学会の開催されたアリガール回教大学はベナレス大学、ハイダラバード大学、シャンティニケタン大学などと並んで国立大学（といつても日本の国立大学と異り、イギリス式の大学資金委員会から国家の補助金を受けるもの）の一つであり、かなり大きい大学である。アリガール駅をはさんで西側に市街があり、東側は殆んど全部大学の敷地で占められ、広大な敷地の中に大きな煉瓦造の建物がゆつたりと構えており、芝生や花園などが美しく、誠に学園の雰囲気満点という処で、せせこましい処にきたない木造の建物をごちやごちやならべた大学の多い日本にとつては羨しい程である。この大学は神学、芸術、理学、工学、医学の五学部から成り約5000人の学生がインド各地から集つている。回教大学といつても、もちろん回教徒だけではないが、日本にもあるキリスト教の大学などと同じく回教の礼拝堂（モスク）が学内にあり、回教神学やイスラム文化の研究にはかなり力を入れている特色のある大学である。この大学は他の大学と異つて男女別学で女子のためには別に女子大学が附属している。黒いコートのような長い上衣と白い細いズボンの制服を着たこの大学の学生は皆とても真面目らしい。大学の授業料は月15ルピー（1ルピーは約75円）大学院が20ルピー、一月の学費が寄宿舎で60ルピー、ここらは日本と大差ないようである。新学期は7月中旬から始つて4月中旬に終り、4月～7月は夏休暇（この頃が最も暑い）、その外に10月に半月程、12～1月の年末年始に半月程の休暇がある。インドでは小学校4年（義務教育）

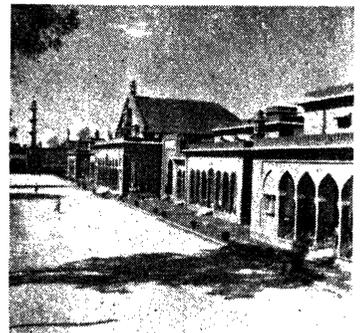


写真7 アリガール回教大学

、中学校6年、大学4年で、義務教育年限は日本よりはるかに少く又全国民の何%が教育を受けているかは疑問で、この点にインド今後の大きな問題が横たわつていようべきであろう。日本では入試問題が学校教育の痛になりつつあるがインドでは特殊な工学部などを除いては入試難などはないようである。又大学の数が少いことにもよるが大学を出れば就職難ということも余りないらしいから学生も日本よりものんびりと勉強しているようである。しかし前記の如くインドの大学生は享樂的な処は少しもなくきわめておとなしく又真面目に見える。それは結局生活態度の問題であり、大学生のみならずインド人全体の生活態度がそうなので、享樂的な面はできる

だけ切りすてて無駄をはぶき国家の再建に努力しようということと私などは善意に解釈している。貧乏国のくせにやたらに享樂的な方面ばかり発達してゆく日本には、酒ものまですに頑張っているインド人は大いなる手本であろう。ただインド唯一の娯樂は映画で、映画だけは大眾娯樂としてかなり普及している。大学生に聞くと月二回位見るとのこと。インド映画は歌と踊りが必ずつきもので大体余り現実性のない夢物語が多いらしいが、唯一の大眾健全娯樂としてはそれでよいのだろう。

しかし私が見た Jhanak Jhanak Payal Baaje などは色彩映画で実にきれいであり、テンポののろいのが我々には一寸あきたりないが、映画技術の点からはインド映画もなかなかよい所があると思つた。

アリガール大学では学生の80%までは寄宿舎に入っている。学生生活を快適なものたらしめるクラブ、図書館などの施設はよく整つて居り、クリケット、テニス、パドミントンなどのスポーツも仲々盛んなようだ。しかしインドの大学生も経済的には苦しい者もあるとみえて、アルバイトなどいろいろ行われており、学生自身の経営による消費組合も或る程度活動している。國際地理学会の開催期間中、全学を挙げて歓迎し学会の成功のために協力して呉れたこの大学の学生諸君の真面目そのものような顔付を思い出すとインドの将来も又頼もしい気がする。

#### (4) ムガール帝国栄華のあとアグラ

デリーから約180km 東南方、同じジヤムナ河のほとりにムガール帝国の旧都アグラがある。アグラといえばタージマハールを思ふぬ人はあるまい。このタージマハールはムガール王朝最盛期のシャージャハン帝(1628~1666)が帝に先立つて死んだ愛妃ムンタズ=マハールのために建てた墓で、1630年工を起し22年の歳月と数千万ルピーの巨費を投じて完成した。

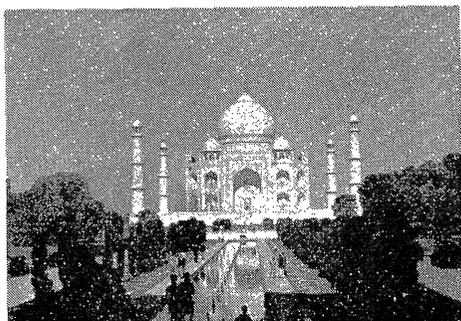


写真8 アグラのタージマハール

内部には中央に王妃の墓がありその脇に皇帝も死後合祀されている。白亜の大理石の王冠状大ドーム(高さ地上から240呎)が四方を小塔にかこまれて青空にひつそりと漂う如くそびえている姿は、前庭の細長いプールと芝生と糸杉のシンメトリカルな配置と調和して

誠にこの世のものとも思われぬ美しさである。このインド第一の名所の名前を知つたのはたしか筆者が中学時代であつた。東洋史の教科書の口絵に載せられていたタージマハールを見てその異国的な様式美に打たれたものであつた。その月光に映えるタージの美しい姿は我々にとっては夢幻の世界のものでしかなかつた。しかしそれは現実に存在していたのである。しかも多くの夢は幻滅の悲哀を感じさせるものであるのに、正面の入口を入つて行つてこのタージの姿を一目見た時に私は声をのんだ。いかにも美しい。我々が日本に持つ奈良の古寺や日光の美しさとは全く如何なる点でもちがつた美しさである。夢は現実であつたのだ。しかもこのタージは遠くからでも近くからでも、表からでも裏からでも又右左いずれからでも変らぬ美しさを見せる。それは完全な調和美であり様式美であるからである。タージそのものは白一色にしかすぎないのであるが。

内部に入ると内陣の中央、皇帝と妃の“ひつぎ”の置かれている処は四方の大理石すかし彫りの明り取りからの光も殆んど入らず真暗である。案内人の差出すローソクの光に宝石をちりばめた豪華な“ひつぎ”が浮び出る。本当の棺はこの地下にあるという。案内人が“オーツ”と大声を上げる。とその声が高いはかなドームに反響して静かに吸い込まれる如く消えてゆく。ここは黄泉の国である。

タージの裏はすぐジヤムナ河の聖なる流れに臨んでいるが、シャージャハン帝は対岸に自分の墓を

造り、この両者を橋で結ぶ計画をしたが果さなかつた。アグラ市街に接してデリーのものに似たレッドフォートがあるが、ここはアクバル帝が建設し、1600年にラホールから都を遷した処で、その後ジャハングール帝を経てシャージャハン帝に至る迄ここがムガル帝国の首都であつた。シャージャハンは後アグラからデリーに都を遷したが、晩年はその子アウラングゼブによつてアグラのフォート内に幽閉された。彼はフォート内の宮殿から約1哩へだたるはるかなタージを日毎ながめて愛妃をしのんだといわれる。フォートの内部はデリーのものと同じくシャージャハンの建設になる幾多の豪華な建築物で満たされ、在りし日のムガル帝国の榮華をしのばせる。ムガル帝国はアウラングゼブの死後実質的に崩壊したが、それにはタージを始め多くの土木建築を起して人民をその負担に堪え難からしめた圧制が原因の一つに数えられよう。今残る美しい建築物の土台の下にこれら人民の苦しいうめきの声が秘められていることを思う時、美は単なる美ではなく、芸術は単にすばらしいタージを設計した技術家のみのものでないことを深く考えさせられる。アグラ周辺にはこの外ファアテールシクリーの廢都、シカンドラのアクバル廟、イテイマードウツダウラの墓など多くのムガル時代の美しい建物が残されているのである。

(未完)